大学院での修行で得たもの

北斗市立大野小学校
教諭　佐々木　朗

私は平成 16 年度から２年間にわたり、北海道教育大学函館校の大学院にお世話になりました。自分の今までの人生の中でもとても輝いていた時間であり、現職においても有意義でした。私の拙い経験ではありますが、今後大学院を目指す方への励みになればと思い、キーボードに向かいます。

１．大学院への道は２つ

大学院に入るには、２つの道があります。一つは北海道教育委員会の派遣によるものです。大学院の２年間のうち最初の１年は勤務場所を離れて研修に専念できます。学校へは代替が入り、学校へ行く必要がありません。もう一つは、勤務しながら大学院に通うというものです。大学院には現職の先生も多く在籍していることから、午後６時からの授業も多く開講されています。学校が終わって６時まで大学に着き、授業を受けるというものです。ですから、相当の努力と根性がいることは確かです。

２．派遣で大学院に行くために

私の場合は、前者の派遣でした。毎年 6 月下旬から７月始め頃に道教委より大学院派遣の募集案内が来きます。ファックスなどで流れて来て、締め切りが次の日などということも珍しくありません。そこに希望する専攻、研究内容などを記入し、提出します。志があれば、様式は毎年ほとんど同じなので、事前に準備しておくことが望ましいでしょう。

次に教育局の面接です。応募が多ければ渡島の段階で人数が絞られるようです。志望動機、学校での研修など 25 分程度の面接がありました。それに合格すると、いよいよ道教委の論文試験、面接試験です。道庁の別館、入るだけでドキドキする道教委のお膝元。どちらを見ても優秀そうな先生方が 30 名位はいました。午前中の論文では、「諸外国と比べて日本人の子どもは勉強嫌いである。あなたはそのことをどう考え、指導していくか。」というような内容でした。1200 字、60 分の手書き勝負です。これは練習していないと書けるものではありません。市町でやるゼミや校長先生などに指導を受け、教育の今日的な課題については、一通り書けるようにしておくことが大切でしょう。さらに、手で書くということにもなれておく必要があります。午後からは面接です。志望動機、学校での研修、教職員としての信念など 20 分ぐらいの時間かかりました。

9 月に入ると結果が届きました。３度めの挑戦で受かりました。志あれば１度で諦めず、何回か続けて挑戦することも大切です。これで派遣は勝ち得たのですが、あと一つクリアしなければならないことがあります。大学院の試験に合格することです。

大学院の試験は結果が届いてあまり期間がありません。受検の手続きや受験料などは全て自分で行います。試験問題は、教育用語やいくつかの心理学用語などですので、現職の先生でしたら、いかようにも書ける内容です。また、面接は、大学院で研究したい内容についてつっこんで聞かれます。きちっとした動機がある先生はよほどのことがない限り落ちることはありえないと思います。

ということで、私は大学院に派遣で合格することができました。

入学金、授業料合わせて 100 万円以上が自費になりますが、私の場合、学校へ行かなくても給料や期末手当は出ましたので、とても恵まれていました。

３．入学

入学式は、学部生と同じ体育館で行われました。大学を卒業して 22 年、その時間が一機に戻ってきたような自分が 18 歳で入学したあの時の新鮮な気持ちそのままであったような気持ちでした。

全てが新鮮で、自分の部屋にファイルや本を並べ、真ん中にパソコンを用意し、「さあ、やるぞ」という気持ちをいっぱいにしました。

４．一日の使い方は本人次第。

入学式から花の学生生活。勤務時間も拘束されなければ、何をしていても何もしなくても自由。時間の使い方は本人次第です。思えば私が学部生だった頃にコンピュータに出合って、大

学の４年間は、びっちりそのことを勉強しました。大学の４年になっても、朝研究室の鍵を開けるのは私。また、最後を閉めて帰るのも私でした。その習性は未だに残っており、私は８時には出勤（登校）し、６時までは勉強しようと決めました。せっかくの機会だから、やろうと思うことを思い切りやろうと思いましたし、私は道教委からの派遣という看板を背負っているので、それに恥じないようにしようと思ったわけです。

私の研究の専門はもちろん情報教育ですが、それだけに終わらず、あちらこちらに顔を出しては、気の利いたこと、でしゃばったこと、おもしろいことをした一年がスタートしました。

５．時間割を決める

大学院の時間割は、私の専攻した学校教育の場合はとても広い範囲から選ぶことができました。私が前期履修した講義は１０駒でした。あと夏休みの集中講座が１つです。月、木、金が３駒、水曜日が１駒です。一番詰まっている３駒と言っても、１講目はないですし、半分ぐらいは空き時間です。火曜日は授業がありません。それでも精一杯授業を入れたのです。

私は、授業開始前に、一人一人の先生のお部屋を訪ねて、どんな授業なのかをお聞きしてそれから最終的に決めました。大学院の授業は多くても 15 人程度なので、現職の教員がいるといないでは、教える方も心の準備もあるのかなあと思い、失礼に当たらないようにご挨拶方々回ったわけです。学部生の頃と一味違って、どの先生も親切に懇談的にお話を聞かせて下さり、多くの先生と顔をつなぐことができてとても良かったなあと思いました。

６.情報機器入門のアシスタントに無理やりなる。

大学 1 年生の前期の必修科目に情報機器入門があります。大学のネットワークを使うに当たり、身につけておかなければならないスキル、そしてレポートを書くためのワード、エクセルなどのアプリケーションの使い方、そしてウェブやメールの技能の習得です。

月曜の 1 駒目の情報機器入門は私が学部時代にもお世話になっているＡ先生とＵ先生の

授業。無理を承知でお願いして、アシスタントをさせてもらいました。

最近の学生はコンピュータの操作に強いかと思いきやそうでもありませんでした。高校の情報が必修になる狭間であったこともあり、また、ほとんどの学生がいわゆる進学校から来ているということもあり、学校の授業でコンピュータに触れるという機会はさほど多くなかったようです

キーボード入力などもまだまだだったり、へんな癖がついていたりでした。それでも学生さんたちは、とても素直に授業に臨んでいましたし、若者ですので、習得は速く、授業はいいテンポで進んでいきました。私はすっかり月曜の朝の顔の一つになり、とても楽しみな授業の一つになりました。

６月に入って、内容はエクセルです。私は「エクセルを私に教えさせて。」とずうずうしくも先生に頼みました。どちらの先生もわかってくれ、私が学生にエクセルの基礎を教えました。情報研でやっているようにテキストを作り、青木先生に印刷してもらい、当日に臨みました。アシスタントから、その時だけの臨時の先生に昇格して、私はとても気分よく、いつも学校でやっている調子で学生に勉強を教えました。

宿題をメールで出して、学生に添付ファイルを教え、メールで指導するという場面もありました。また、教職員を目指す学生さんたちにメッセージをメールで流すなどの交流をすることができました。中には、コンピュータがほしいから相談に乗ってほしいなど、先輩としての役割を少しは果たせたかなあと思っています。

７．あいさつ運動

私が大学に入って、とっても気になったことがあります。それは挨拶です。友達同士は大丈夫なようですが、先生方に対しても、先生方からも挨拶がないことです。そこで私は決めました。「全部の先生方、全部の学生に挨拶をしていこう。」と。私は「この人だあれ？」と思われないように名札をつけて、会う学生、会う学生、そして先生方に「おはようございます。」、「こんにちは。」、「こんばんは。」と挨拶しました。最初は怪訝そうにしていた学生さんたちも、何か月後かには、向こうから挨拶してくるようになりました。小さなことかもしれませんが、挨拶は人と人とをつなぐ潤滑油であり、特に教員を目指す者、教員を目指す学生を指導する先生方にとっては大切なものと思っています。

８．ゴミ拾い

20 年振りに大学に戻って驚いたことの一つにキャンパスのゴミの多さでした。駐車場には、コンビニの弁当の殻、たばこの吸殻、ガムや飴の包み紙など、恐らく本学の学生のものと思われるゴミが散乱していました。また、不思議なのは、通路にゴミが落ちていても、学生も先生方もほとんど拾う姿を見かけないのです。教育現場は、指導内容も大切ですが、教育環境も私はとても大切だと思います。自分の勤めていた学校であれば、子どもたちが「先生、ゴミ落ちていたよ。」と拾ってくれますし、こんなにも汚れていたなら、全校で清掃するなどの指導を取ります。だから、駐車場にゴミが落ちていてもそのままという現状に耐えられませんでした。

私は４月に外清掃をしました。最初は八幡通の学生駐車場、桜の記念植樹のあたりをビニル袋を持ってゴミ拾いをしました。大学の事務の女性職員Ｔさんも手伝ってくれました。

とかく組織というと自分の責任を果たせばそれでいいと思いがちです。もちろん自分の与えられた役割をしっかりこなすことは大切です。私はその上に、広く自分の職場全体に目を配り、一人一人が職場全体に責任を持つということが今求められているのではないかと思います。ディズニー７つの法則という本には、「ディズニーランドではゲストに対して責任を持たなくてもいい人は一人もいません。園内を美しくすること、全てのゲストに園内の人や物が

語りかけ歩み寄ること…これらは全てディズニーの文化であり、伝統なのです。肩書きやポストは無関係です。会長も社長も、ディズニーの人間である以上、それはごく当たり前のことなのです。」Ｔさんには、その後、私の目から気がついたことを相談し、多くのことで力を貸していただきました。私のある意味勝手気ままなお願いや苦情にいつも笑顔で接してくださり、解決に向けて真剣に考えて下さり、どれだけ私の大学生活の支えになったかわかりません。改めて感謝感謝です。人に接する時の態度をいまさらながら学ばせていただきました。

さて、ゴミの話に戻りますが、汚いところには、人はゴミを捨てたがるものです。逆にゴミ一つないところにはゴミを捨てにくいものです。私は 4 月に集中的に朝のゴミ拾いをして、後は毎週金曜日の朝に定期的にキャンパスの外周、自転車置き場などを回り、美化に努めました。半年も経つと、1 回で拾うゴミの量も少なくなり、学生たちにも美化意識が少しずつ育ったかなあと思いました。

９．清掃のおじさん

大学内の清掃は清掃業者が入っています。学内のゴミ箱のゴミの収集、廊下や講義室のモップがけなどをしています。最後まで名前をうかがいませんでしたが、私はいつもゴミを集めているおじさんとよくお話をするようになりました。私を含めて、学内のゴミは、このおじさんが全て収集します。そして、裏のゴミ保管庫に運ばれ、全てを再仕分けしています。学内にもゴミは分類されていますが、どうも規定通りいかないようで、もう一度作業をするということです。「ゴミの出し方が悪いところもあるでしょ。」と話すと、ニコッとしていましたが、きちんとするようなどという注意はしないそうです。ただ黙々と、仕分けするそうです。大学から仕事を請けている外部の業者というのは、つらいものがあるのかなあと思いながら、私たち一人一人が気をつけて余計な手間隙をかけないようにしなければなあと思いました。

私は、卒業式の前の日に感謝の気持ちを込めて、会社の控室のプレートをプレゼントしました。それまで厚紙にマジックで書いていたのですが、イラスト入りのかわいい看板を作り、先ほどのＴさんにこっそりお願いしてラミネートしてもらいました。今でも夜たまに大学へ行くと職員トイレの奥の部屋には私の作った看板が掲げられており、「おじさん、元気で毎日仕事をされているのかなあ。」と思います。

このように文句一つ言わず、黙々と仕事をされる姿を見ると、人間の偉さって、全ての肩書きを取った時に表れるものだなあとつくづくと思ったのでした。

10．自転車は自転車置き場に

20 年振りに大学に戻ったからか、私が教員という仕事を長くしていたかわかりませんが、大学の先生方、学生には見えないものがいろいろ見えてきます。その一つに、自転車の置き方

のことがあります。

上の写真は、５月頃の写真です。赤いポールが立っているのは自転車を停めないでという意味です。その真ん前に女子学生が今自転車を停めようとしています。また広報の自転車小屋の道路側も駐輪禁止になっています。確かに自転車の台数は多く、放置されていると思われる自転車も数多くあり、駐輪場が十分にあるとは言えませんが、まだまだ駐輪場に空きがある状態です。

そこである日、いつもの学校の先生根性で、駐輪場の前に立ち、数台ある置きっ放しの自転

車を寄せ挨拶運動を兼ねながら、自転車の置き方について、声をかけました。いつもの場所に置こうとする学生さんに、「おはよう、中の方空いているから、そっちに置いてくれる？」と声をかけると、誰一人文句言うことなく、従ってくれました。最初の何人かに声をかけると、あとは、「おはようございます。」だけで、ポールのところに自転車を置く学生はほとんどいませんでした。

写真がその日の９時過ぎの様子です。見事なくらい、決まりを守っていない自転車はいません。

先ほどのゴミのところでも書きましたが、決まりを守らない自転車があると、そこにはまた決まりを守らない自転車が集まるという法則が成り立つようです。確かにお目付け役の私がニコニコしながら、挨拶をしていたっていうのもありますが。

年から年中、私が生徒指導の先生をやるわけにもいかないので、その後は学生さんの道徳心に任せましたが、しばらくは、まともな状態が続きましたが、残念ながらもとに戻ってしまったようです。

11．大学院紹介ビデオ

毎年７月頃に大学院説明会が開催されます。大学院説明会には、次年度大学院を目指す学生、そして現職の先生など 20 名位が集まり、私達先輩も参加し、大学からの説明、そしてその後、専攻別に相談会、そして先輩たちの話を聞くという流れです。私も大学院に入る前の年、参加しました。そこで思ったのですが、「話だけじゃあ、つまらない。」大学院の授業ってどんなことをやっているのか、特に現職の先生は、しばらく学生をやっていなかったので、興味があるところだと思いました。

「そうだ。大学院を紹介するビデオを作ろう。」私は、教務のＭさんに当たって見ました。幸い快い方向の返事をいただいたので、早速着手しました。修士論文とは全く関係ないのですが、それほど時間には余裕があるのです。

まずは構想を立てました。授業の様子を取材

しようということは決めていました。どの授業を取材しようか、できるだけ全教科が入るように、趣旨をまとめたものを持って、先生方の研究室を回りました。回ったほとんどの先生方から、了解をもらい、ビデオカメラを片手に取材に歩きました。

そしてもう一つ、参加者の心を揺さぶるのに「先輩からのアドバイス」を入れようと思いました。学部を出て目的意識なく、大学院へ進学するものではない、ということで、吹奏楽指導の専門のＭさん、美術のＳさんに、そして、現職の先生からは、「幅広い教員としての感覚を身につけることを知らせたい」そんな思いで、

M中学校のN先生、F小学校のT先生にもお願いし、メッセージを語ってもらいました。

編集作業は私のお手の物。ムービーメーカーを使い、そこそこの作品に仕上げました。完成品を教務のMさんに見せたところ、想像以上の出来栄えらしく、とても喜んでいただきました。

大学説明会では、副学長さんより労いの言葉もいただき、「いい仕事ができたかな。」と思っています。今でも私の大学院時代の思い出の大きな財産の一つとなっています。

12．七夕

これも小学校教員の感覚なのか、7月7日にどうしても大学の玄関前に笹の飾りをつけたくなり、これも教務のMさんに、相談しました。物好きの私のことをだいぶわかってくれたのか、「どうぞ、どうぞ。」ということで返事をもらいました。幸いにも教育大通りをはさんだ向こうに笹が生えているところがあり、そこへ切り出しに行きました。

飾りに使う半紙や色紙は、ちょうど大学院の部屋（情報処理センターの真下の2階）の周りに幼児教育や特殊教育の研究室があり、そこからもらえるものをもらい、また、「ねえねえねえ、手伝ってー」と声をかけ、学生さんたちと当日に作りました。

手伝ってくれた幼児教育と特殊教育の学生さんには、短冊を渡し、「これに願いを書いてね。七夕に願いを込めると何となく、叶うような気がしない？」って書いてもらいました。

午後になって正面玄関に飾ると、早速学生さんたちが集まってきて、携帯カメラで笹の飾りと写真を撮っていました。

「もしかして、まだ、お願いごとを書く人がいるのでは？」と思って、紐をつけた短冊十数枚とマジックを守衛さんに頼んで玄関に置かせてもらいました。薄暗くなった7時頃、「どんなあんばいかなー。」と思って玄関に行ってみると、短冊が底をついていました。あわてて部屋に戻って、紙を切って、糸をつけて、玄関に置きました。

9時過ぎに、「そろそろ片つけようか。」と玄関に行くと、たくさんの、たくさんの短冊が初夏の風にゆられていました。

次の日、学生さんたちの教員になりたい夢、そのほか自分の持つ大きな希望、一枚一枚に目を通しながら、みんなの夢が叶いますようにと、私も祈りました。

教員養成大学の玄関に七夕は合っていたなあと思いました。

13．パレードは見るものではない、踊るもの

教育大学では毎年8月の港祭りに協賛して行われる一万人パレードに参加しています。7月頃でしょうか、学内に参加者募集のポスターが出ていました。学内のポスターの画鋲が取れていると直していた私ですから、学内の掲示にはほとんど全て目を通していました。

「やってみようかなー。」そんな軽い気持ちで、申し込みをして、昼休みの練習会場に行きました。もちろん来ているのは、私の子どもみ

たいな学生ばかり。その年のテーマ曲は大塚愛さんの「さくらんぼ」「♪愛してるー」っていうのです。体育系、踊り系は弱い私ですが、学生さんたちに１０歩ぐらい遅れながらも休まず練習に出て、何とか振り付けを覚えました。練習のある日は、着替えを持っていくほど汗だくでした。練習に来るのは２０名位で、当日は大丈夫なのかなーと思っていました。

パレード当日は、雨。中止の連絡を待つような状態でした。それでも決行することに決まったので、待機場所の堀川広小路までバスで移動しました。以前として雨が降り続いています。ところが、パレード出発わずか前に雨が止みました。熱気が空に通じたとしか思えないぐらいの天候の変わりようでした。

練習の時とは違い、体育系サークルのメンバー、ほとんど全員集合です。４００名近くの大集団です。それが青と黄色のはっぴを身にまとい、踊る姿は周囲を圧倒するものがあります。

ほんのりと薄暗くなる頃に堀川町の電車通りをスタート。五稜郭交差点に差しかかる頃は、夜のとばりも降り、盛り上がりも絶好調。もう何もかも忘れて、大きなかけ声を出しながら、踊りました。

道新前のゴールにたどりついた時は、「人生でこんなに幸せなことってあるの」って思う位充実した気持ちでした。

この踊りに参加して、また多くの学生さんや先生方と知り合えたし、パレードって見るものじゃない、踊るものだとつくづく感じました。

もう少し続きがあって、パレードには審査があります。港祭りの最終日、審査発表ということで、私は、気になって、大門の会場に行きました。結果は見事、準優勝でした。私も実行委員会の学生さん、先生と一緒に喜び合いました。

夏真っ盛り、私の輝く思い出の一つです。

14．夕陽会のホームページ担当

私が大学院院にいて、比較的時間に余裕があるということで、私は夕陽会のホームページ担当の一人にさせていただきました。

夕陽会というと、懇親会、寮歌などというイメージで、学部生にとっても、卒業生にとっても、あまり縁のないというか縁を感じない人も

多いようです。

私がたまたまホームページを担当させていただくということで、夕陽渡島の総会、夕陽本部総会、支部長会などを始め、美術展、音楽会などに参加し、取材活動を行いました。

そういう中、会長のK先生と出会い、夕陽について、語り合い、私はすっかり夕陽ファン（表現はおかしいけどまさにそうです）になりました。

時間があるということもあって、夕陽会のページを全部見直し、リニューアル、また、資料館にも何ども足を運びたくさんの写真を写して、それをインターネット上で公開する作業に携わりました。

大学は創立 90 周年を迎え、国立大学法人となり、また長い間続いた教員養成に終止符を打ち、あらたな展開を歩みだす年でもありました。

昔を懐かしむだけの会ではなくて、今の大学の現状を見てほしい。そして、これからも北海道教育大学函館校、そして学生さんたちを応援してほしいということで、「母校の今日」というコーナーを作りました。

私のホームページに対するコンセプトは、いつでも新しい情報が載っているということです。どんなに見映えがするホームページでも二年前のことがトップページに載っているようでは誰も見てくれません。見るたびに新しい何かが載っている、そんなページが私は理想だと思うのです。

私は、毎日、お気に入りの写真を一枚ずつ、コメントをつけ、アップしました。川島会長はじめ、多くの方が宣伝してくださったこともあり、固定客をつかんだというか、毎日カウンターの数字が上がっていきました。

このホームページを担当させてもらったことで、すっかり夕陽会は私にとって身近なものになり、卒業する学生さんには、自信を持って、「是非夕陽会にお入りなさい。」と言える自分になりました。

15．N校長先生との再会

私が今でも日本一だと思っている校長がN校長先生です。先生とは東光中学校時代にご一緒させていただきました。「責任は私が取る。思い切りやってくれ。」というタイプの校長先生で、当時私を始め若い先生ばかりの東光中学校でしたが、安心して仕事をすることができました。

修羅場を何度も経験されているだけあり、常に適格な情報収集、判断、そして納得いく先生方への指導指針が示され、私達は一枚岩になり、東光中学校を守り、子どもたちを育ててきました。

そんな私の大好きなN校長先生が教職をめざす学生たちの講義を持ち、相談者になっているということで、時間を見つけては、私も校長先生の所に通っては、学生のこと、今の学校のこと、教師としてのあり方など、指導をいただきました。

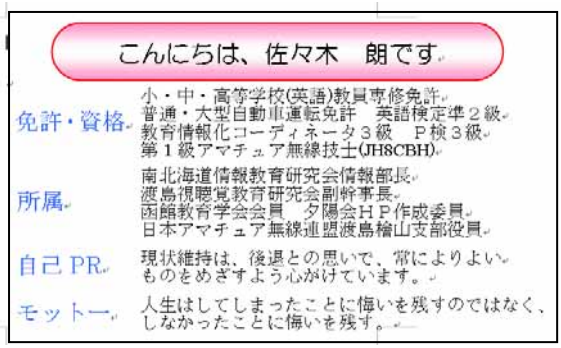
幸いその年、函館校の教員採用試験の登録率は５分校の中で一番良かったとのことで、私は学生さんたちの努力はもちろんですが、N校長

の存在がいかに大きかったかということを確信しています。

16．名刺づくり

これも私にとって忘れられない仕事の一つです。N校長先生は教職担当、そして民間就職担当がＩ先生でした。Ｉ先生は長く市役所に勤められ、みらい大学の設立に関わることなど、多くの企画に携わってきた先生です。多くの企業のトップとも面識があり、学生たちのよきアドバイザーになっています。私はN校長がいたこともあり、ちょこちょこ相談室に顔を出すようになったこともあり、Ｉ先生ともお話をするようになりました。

その中で、学生が就職活動をするための名刺を作らせたいとの話があり、私がその任を受けることにしました。事務のＳさんも材料の準備や学生との連絡に当たってくださいました。名刺は自分をＰＲするものということで、私が策



を練って先生に、見てもらったところ、合格をもらいました。

30 名以上の学生の名刺を作ったと思います。時間を調整して、写真をとってあげたり、裏の文章を練り直したりで、結構な時間がかかります。私も長年教員をやっていることもあり、人に限られた文字数で伝えるにはどういう文章にしたらいいかなど、学生さんたちにお話しながら、作りました。

今でも思い出に残っているのですが、３年生の女の子から「明日就職相談会です。名刺がまだないんです。もう締め切りですよねえ。」という電話がかかってきた。夜の８時頃です。「もう締め切りですよねえ。」の裏には、「締め切りを過ぎたのですが、何とか作ってもらえないでしょうか。」という意味が込められています。現実の厳しさを思い知らせるより、ここは、温かく、明日の相談会に送り出してあげようということで、冬の道を大学に向かって、ストーブにあたりながら、名刺を作りました。

嬉しかったのは、就職の報告をきちんとしてくれた学生。ほとんどが、名刺完成でおしまいだったのですが、きちんとお礼を言える子は将来大丈夫だなあと思いました。

17．理科サークルに参加

授業のことで理科教育のＴ先生のお部屋に伺った時、現場の理科の先生方を中心としたサークルがあり、教育大で勉強会があるという話を伺った。私の専門は理科ではないものの、長年理科専科をやっていたこともあり、また自分自身理科がとても好きだということで、参加してみることにしました。

何か、レポートをということで、私は電気パンの準備をして会に臨みました。電気エネルギーは、熱、光、音、動力などに変換され使われていきます。今回の電気パンも、電流が流れることによって発生する熱で、ホットケーキミックスを焼こうというものです。

私はその日朝から研究室でいいにおいをさせながら、ケーキ作りに励みました。

時間ごとの電流を記録し、その様子を加え、グラフ化した。ちょっとは理科の実験らしくなったかと思います。

こんなのでいいかなあと思いながら、はじめて参加させていただいたが、ほめてもらって、嬉しかったです。他の先生の専門的な実践を聞くことができて、とても勉強になりました。

しばらく、例会から遠ざかってしまいましたが、毎月届けられる会報を楽しみにしながら、今回は不真面目会員の罪滅ぼしということも頭に置きながら本レポートを書いている次第です。

写真は、野草の天ぷらです。思ったより美味でした。

18．クリスマスイルミネーション

私が大学院生活の中で最も力の入ったのはクリスマスイルミネーションでした。4月から半年以上大学というところで生活して感じたのは、毎年決まったレールの上を学生たちが走っているような気がしてしようがないということです。私は、特に若い人には、常に新しいことを考え、計画し、実践してほしいと願っています。今「生きる力」というのをよく聞きますが、まさにこの力だと思います。言われたことをやるのは当たり前ですが、言われたことに付加価値をつけるとか、言われなくてもいいと思ったことはやってみる、それで失敗したらそれはそれでいいじゃないかということです。前に名刺の話をしましたが、私のモットーとして、「人生はしてしまったことに悔いを残すのではなく、しなかったことに悔いを残すものである。」というのがあります。しようかしないか迷ってしなかったことの方が、やって失敗するより後悔するものであるということです。今までたくさん、大学院での生活のことを書きました。書いてきたことのようにうまくいったものの他に、まだまだやってきたこともありますし、逆に、やってみたけど認められなかったもの、失敗したものもあります。でも、それらをひっくるめて、今私は大学院生活を「幸せだった」と振り返ることができます。それは、常に大学を良くしたい、学生たちを育てたいという気持ちで突き進んだことにあったと思います。

大学の玄関前の木にイルミネーションをつけようと思ったのはちょっとしたきっかけでした。毎日通る遺愛高校の前のツリー、そして息子が通うみらい大の玄関のツリーを見て、「何で教育大にはこういうすてきなものがないの？」という発想に始まりました。

私は構想を企画書にして、院生の仲間数人に呼びかけ、係に相談に行きました。物事の企画を立てるのは私の得意分野。目的、内容、運営計画、資金、係分担など、いつもやっているように体裁よくまとめました。企画書は学生委員会の了解をもらい、副学長決裁もすぐにおりました。その影には、こんな私の企画を影で支えてくださったＡ先生の力もとても大きかったと感謝しています。ですから私は全く孤独感はありませんでした。

何とかクリスマスイブ前までには、冬の夜空を照らし出すイルミネーションを点等させた

いとの思いでいっぱいでした。

まずは、実行委員の募集です。ビラを作り手分けして、講義室前、学食などで、学生にばら撒きました。

十人来るか、また、部屋に入りきれるか、期待と不安でいっぱいでした。初顔合わせの日、集まったのは新しいメンバーは、たった一人。３年生の女の子でした。（あとからその子の友達も参加してくれた。）意外さに驚きながらも、参加した人だけが得られる充実感を一緒に味わおうということで、新しい二人のメンバーを加えて、０からの出発となりました。写真のようなポスターを夜に集まってわいわい言いながら、お菓子を食べながら作りました。

一番たいへんだったのは、資金づくりです。学生からお金を集めるわけにはいかないということで、大学の職員の皆さんから、少しずつ寄付をもらおうという企てです。いきなりでは門前払いになるだろうと思い、事務方と調整しながら、全教職員の棚に趣旨説明のプリントを入れ、実行委員の学生さんが、それぞれ得意分野とする先生のところに当たってくだけろということで、寄付をもらいに走りました。私はもともとは気が小さい方ですが、勇気を出して、学生さんが回らない先生方の部屋を回りました。

多くの先生方の部屋を回ると、良くも悪くもそれぞれの人間性というものが如実に表れることを思い知らされました。

ある先生は、部屋に入れていただき、企画に感激したとコーヒーまでサービスして、心余る多くの資金をいただき、またある先生は、話も聞いてもらえず、引き返した。寄付をする、しないは全くの自由であり、企画に賛同できなければ、断ればいいのです。しかし、どのような考えであっても、初めての訪問者に対する接し方というものはあるはずです。大学教授という肩書きをとったら、世間で通らないのではないかという先生もいらっしゃることも目の当たりにした。

嬉しかったのは、事務方である。それぞれのグループごとに進んで集めていただき、多くの方から寄付をいただきました。実行委員みんなで、事務室に入り、大きな声でお礼を言いました。また、副学長さんからも「イルミネーションはあまり好きじゃないけれど」とおっしゃりながらも、学生が自分達の大学を良いものにしようという企画にはえらく感動してくださり、ご厚志をいただきました。

最終的には、実行委員会のメンバーが細かく動いてくれてこともあり、私がはじいたそろばんよりかなり多くの資金が集まりました。

雪が降り積もり始めた頃の休みの日、都合のつくメンバーで、イルミネーションの買出しに出かけた。イルミネーションの買出しといってもイルミネーションだけではありません。電気コード、保護するホース、テーブルタップ、コンセントプラグ、ケースなどいくつかのものが

派生してきます。電気配線は私の専門であることもあり、全てそのへんは任せてもらい、あとは若者のセンスで寄付していただいたお金を

全て使い切りました。

翌日の休みの日、集まれる実行委員会のメンバーが集い、電球をつける作業を行いました。電気配線は私ができますが、木に登ってとりつけるのは、学生さんたちに任せました。テッペン星をつけ、あとは色とりどりの発光ダイオード、白熱球などを取り付け、作業が終わったのは周囲が薄暗くなってからでした。

点灯式は、12 月 20 日午後４時 12 分、ちょうど、８時間目と９時間目の間ということにしました。実行委員の一人にクリスマスファンタジーに携わっている子がいて、その子の紹介でサンタの衣装を借りるまでの演出をしました。

点灯式が終わってクリスマスまで、毎晩午後４時から午後９時まで、冬の夜空にささやかな幸せの光を放っていました。

最終日、私は実行委員会の仲間を全員連れて、びっくりドンキーで打ち上げを行いました。初めて実行委員会で顔を合わせた仲間ともこの半月ですっかり打ち解け、企画の成功を喜びあいました。お酒こそ入りませんでしたが、おいしいものを食べ、私が太っ腹を見せてみんあにご馳走しました。あんな楽しい食事は今までなかったというほど、楽しいひと時でした。

翌日、有志で後始末をし、次の年への期待を込めて、企画書と共にダンボールにしまいました。

もちろん、年が明けてから、寄付をいただいた方にはお礼方々決算報告をし、また、今回の企画をお許しいただいた副学長さんにもお礼に伺いました。副学長室など入ったことのある学生はいなかったので、みんな緊張しながらも、副学長さんが、笑顔で学生たちを労ってくださりました。

この企画を通して、私自身も本当に嬉しいこと、本当に喜べること、本当に感動することというのは、自ら行動し、苦労し、最後までやり遂げた人だけが味わうことのできるものであるということを痛感しました。

現代の子は、飽きやすい、長続きしない、がまんできないなどととかく言われがちですが、我々大人たち、そして次代の人材を直接育てることに携わる我々教師は、子どもたちが感動に感動できる体験をさせ、自らも感動し、その喜びを分かち合うなどの指導力、企画力が大切なのかなあと思いました。

19．パソコン個人指導

40 を過ぎて、コンピュータはもう若い学生にかなわないかなあと思う予想は４月に覆され、情報機器を扱う分野の学生さんと比べても負けないなあと思いました。

就職関係の資料を見ても、今企業が求めているのは人材の能力は、「英語」と「コンピュータ」です。学校の先生でもこれからはコンピュータが使える、子どもに教えられるということも大きな資質となっています。

知り合う学生さんたちに、「コンピュータを勉強したかったら院生質に勉強しにいらっしゃい。」と声をかけました。多くの人数にはなりませんでしたが、何人かは勉強しにきて、エクセルやワード、電子メールなどを勉強しに来ました。

中でも４年生のMさんは、夏頃から、週に一

度程度は勉強しに来ました。ワード、エクセル、電子メール、ホームページの作り方など、学校の先生として一応身につけておいた方がいいと思われるものについては、全て身につけていきました。秋が深まる頃には、スキルも相当にあがり、中古でしたが、自分のノートパソコンを購入しました。今、教職について、現場の第一線で働いていますが、教材つくりや通信などでパソコンを使いこなしているそうです。

20．大学院の授業

授業のいくつかは、レポートを事前に作って、それを発表し、討議するというものでした。「誰か最初にやってくれませんか。」というものには、私は一番に手を挙げました。とにかく時間だけはありましたし、課題についてのまとめものは、それなりにいつもやっていましたので、やれるかなあと思ったわけです。最初っていうのは、他がどんなものをしているのかわからないのでつらいところもありますが、その反面、他のしがらみがなく、思ったようにできるところが多いので、良かったかなあと思います。それに、最初にやってしまうとあとは気分がすっきりというのも大きかったです。

授業は、一番少ないので二人、多くても二十人位です。もちろん、学生さんたちのほとんどは若い子たちです。私にとって授業はとても楽しかったです。なぜかって言うと、若い学生さん、専門知識のある大学の先生、現場経験の長い私という三者がうまくからみ合って、討論が成り立っていくからです。大学の先生にとっては、私みたいのがいるとやりにくいのかなあと思いましたが、「佐々木さん、学校現場では実際どうでしょうね。」と振ってくれ、実際の子どもたちとの過ごし方、指導の仕方などをお話することができました。私にとっても、現場の毎日で精一杯の毎日でしたが、大学の先生から、専門的なこと、例えば、日本の教育の歴史、文部科学省の今の押さえ、将来展望、諸外国の動き、これからの日本の教育の動向など、今になって思うと、非常に教育に対して、今まで考えたこともなかった新たな角度から物事を見ることができるようになって、とてもためになったと思います。

21．電気の授業

私の小学校以来の得意分野は電気です。見えない電気が音や光を放つ。また、世界中を飛び交っている電波も目に見えませんが、受信機を通して、かすかに聞こえる地球の裏側から発信されている電波。小４で初めてラジオ作ってから、ずっと電気に魅せられていました。一度でいいから専門的に勉強してみたいといういことで、技術の先生の所に行き、受講をさせていただくお願いに行きました。私の話を聞いていただき、学生さんたちと勉強させていただくことになりました。

講義のある木曜日の午後は私にとって楽しい時間でありました。理論的にはとても詳しい大学の先生、そして、電波と毎日付き合い、半田ごてと共にずっと過ごしてきた実践家の私、そして、新しい技術を今身につけようとしている学生さんたち。数人の授業でしたが、それぞれ自分の興味のある分野のレポートを提出し合い、それについて討論しました。超電導や携帯電話の通信方法など、学生さんのレポートに私も随分新しい分野の勉強になりました。私は、ちょっと古典的かなあと思いましたが、教科書にも載っていたモールスの話をして、実際に打って見せて、学生さん達に「よく取れますねえ。」などと言われて気を良くしていました。私は、アンテナの話、周波数の話など、自分がやってきたことを中心にレポート発表をしました。

22．修士論文について

私の専門は、情報教育です。大学院に来たのもその専門性をはじめ、教員としての力量を高めるためです。大学院に入った当初は、まだ、どんな領域から手をつけたらいいか決めてい

ませんでした。ですからとにかく本を読みました。図書館にある情報関係の文献をはじめ、友人から借りた雑誌、そして、教育全般に関わる本、北海道通信などです。

何度も書きましたが、時間だけはたっぷりあります。今まで述べてきたように自分の研究以外にもあれこれと手を出し、それはそれは忙しく充実した日々で、指導教員のＹ先生からは、「佐々木、そろそろ真剣に修論考えれー」といつも言われていました。

夏休みあたりから、情報教育の背景について調べ出しました。その中で、私の興味は、情報が発達することによって生じる影の部分に移っていきました。私は、大学時代にＡ先生、そして今も指導教員であるＹ先生、Ｏ先生、Ｕ先生などの研究室に入り浸ってコンピュータを知りました。大学の４年間は、専攻の教育心理学というより、とにかくコンピュータを勉強し、プログラマー状態にまでなり、あちらこちらの卒業論文の統計処理を依頼されるまでになりました。教職についてからも、学校現場でのコンピュータを利用した職員室の仕事、そして子どもたちにどう教えるかなどの様々な実践をし、発表し、また、組織も立ち上げるなどの活動をして、「コンピュータは便利だよ、これからはどんどん使っていくことが大切だね。」と訴え続けてきました。自らも研究授業を受け、また、研究発表なども数多く手がけてきました。

しかし、２０００年に携帯電話にｉモードが誕生し、携帯メールがあっという間に普及し、合わせてインターネットのブロードバンド化が進むにつれて、インターネットや携帯電話は子どもたちの間にも広まりました。学校現場は、本来の使い方とかけ離れたところで子どもたちが次々にネットの世界に近づいていくことに対して、傍観していることに近い状態でした。

そんな折、ついに起こるべきして起きた、九州でも小学校６年生の児童がネット上のトラブルから同級生の命を奪ってしまったという事件でした。そのことがあって、マスコミも、関係行政も、そして私たち情報教育に携わる者も情報モラルについての指導について、力を入れ始めることになったのです。

私も情報モラルについての書籍をたくさん読みました。そして、私の出した修士論文の方向性は、①地域の情報モラルに対する実態を探ろう、②そのうちの一つの課題について現場教師として授業を行い、それを検証していく。ということに決めました。

アンケートや授業の詳しい内容については、私の拙い修士論文をお読みいただくとして、私は、修士論文執筆では、多くの人と出会うことができ、たくさんの方の協力の上で成り立ったことは言うまでもありません。

アンケートでは、函館市内、函館近郊の渡島の小中学校十数校に、アンケートをお願いし、多くの学校で快く受けて下さり、お忙しい二学期終了間際に子どもたちにアンケートを取ってくださいました。

お世話になったところへの義理は決して欠かしてはいけません。私は、翌年早々にお礼状と共に、協力していただいた学校、保護者に調査の概要を報告させていただきました。

授業は、大学院２年目の 11 月にＫ小学校の児童を使わせてもらい、初めて顔を合わせる子どもたちとのいわゆる飛込み授業です。一緒に授業を組んでくださったＴ先生には、無理をお願いし、了解をいただき、とても感謝です。「個人情報を大切に」ということで、簡単に言うと、わけのわからないホームページに自分の住所や名前を入れて送信してしまうと、そのデータがどこに流れていくかわからず、大変なことに

なるよと言うものです。

私は、個人情報とは何かを指導するために、最近多いニセ電話のスキットを学生さんたちに協力願って作り、また、ニセのホームページも作りました。幸い学校の配慮で夏休み以降は週に一度は大学で丸一日勉強する時間をいただくことができ、ほとんどがその時間で作業を進めました。

本格的に、執筆したのは、冬休み少し前かと思います。今までの人生で、まずほとんどが計画的に物事を終わらすということができず、締め切りギリギリになってようやく間に合わせるというパターンです。また、その人生パターンで全てこなしてきた自信があるというのでしょう、今回も締め切りを間近にして原稿に向かうというスタイルでした。

このレポートも実質丸 2 日位でここまで書いています。私は、大学時代までは文を書くということがすごく苦手でした。ところが教職に就いて、ある年、一日も休まずに学級通信を書いたという今思えば、くだらないことに挑戦したことがあり、また、キーボードが速く打てたこともあり、文章を書くことに対する苦手意識は今ではほとんどなくなりました。

そのようなことがあって、やり始めれば、一日Ａ４十枚くらいは書ける力というか、そのようなものが身についたのです。

同じ院生の仲間も「一緒にやろう」ということで、学校教育の院性室に集い、年末は大晦日まで、正月は２日から、締め切り日まで休みなしでびっしりと机に向かいました。書いてプリントアウトする度に枚数を数えては、お互い「何枚になった？」と励ましあいながら、完成を目指しました。

そんなわけで、無事期日までに、論文を提出することができました。私の論文は、論文らしくない文調になっており、誰でも気軽に読むことができると思います。私のホームページに載せてありますので、とうぞお立ち寄りください。

一緒に最後まで戦った仲間、Ｏ先生、Ｓ先生、Ｋさん、Ｍさんとは、「ガリオの会」（学校教育、臨床心理、音楽の頭文字）を結成し、今でも年のバラバラの同窓会を二月に一度位は開いて交流を深めています。

23．修了式

いよいよ 2 年間の大学院生活も終わりです。１年目はとにかく時間があり、やりたいことを次から次へと手がけた 1 年間。そして、2 年目は、ほとんどが学校の先生生活、そして、冬休みに勝負をかけた修論執筆と本当に忙しかった１年間。

自分としては、長い人生の中でも最も充実していた学生生活でした。また、教職員、そして情報教育の先端にいたこともあり、いい意味でも大学や大学の先生、そして学生さんたちにそれなりにお役に立てる存在になれたのではないかと思います。

修了式は学部の卒業式と一緒です。一人一人の名前が呼ばれます。学部生で知っている名前が次々と呼ばれます。「みんないい就職先が決まったかな。大学院でがんばる子もいるな。」と耳を澄ましていました。もちろん自分の名前も呼ばれて、大きな声で返事をしました。

普段は教職員として列席する卒業式ですが、自分も主役の一人となって席に座るのも、２年間思い切り生きて、過ごしてきただけあって、惜別の念が非常に大きく、嬉しくもあり、悲しくもありました。

式が終わってのパーティーでは、知り合った学生さん、先生方、一人一人にご挨拶をして回

りました。ある大学の職員の一人に、「先ほど表彰された学生さんがいたけど、佐々木先生にこそ、賞状を贈らせてもらいたいなあ。」などとほめていただき、とっても嬉しかったです。

私は、これからは再びＯＢとして北海道教育大学を表になり、影になり支えになれればと思っています。写真は妻と一緒に会場で撮ったものです。

24．最後に

私は志あれば、是非大学院を目指してほしいと思います。北海道教育委員会が派遣として大学に現場教師を送る制度はすばらしいものです。その壁を突破することは難しいことかもしれませんが、気持ちを持ち続けるといつかは実現するものと信じます。夢は持ち続けること、そして絶対実現させると信じることが大切です。

私には、道教委の派遣という看板を常に背負っている意識はありました。その意識の中には、ただ自分の研究をしようというだけではなく、現場の先生が大学へ入り、学生や大学の先生を刺激し、刺激を受けることも私の大切な仕事の一つと思って、それを実践してきました。この他にもいろんなことをやったし、企画段階で没になったことも数知れぬです。

現場の先生だからこそ見えたこと、実践し足跡を残せたことも多かったと思います。

大学院はすばらしいところです。新しい角度で教育を見ることができます。自分自身を向上させる大きな機会の一つと言えます。

教職で大きな夢を持っている方は、是非挑戦いただく、一つの提案になればと思い、2 年間を振り返ったレポートといたします。

私のホームページのトップページ
http://www.edu-hakodate.jp/sasaki/

修士論文
http://www.edu-hakodate.jp/sasaki/shuron/

いろんなやってきたこと
http://www.edu-hakodate.jp/sasaki/sonota/

毎日、妻が作ってくれたお弁当日記
http://www.edu-hakodate.jp/sasaki/bento/index.html